

松 山 大 学 論 集  
第 26 卷 第 3 号 抜 刷  
2 0 1 4 年 8 月 発 行

『高慢と偏見』にみるパターナリズム  
—— ベネット氏からダーシーに受け継がれる  
エリザベスへの教育 ——

新 井 英 夫

# 『高慢と偏見』にみるパターナリズム

—— ベネット氏からダーシーに受け継がれる

エリザベスへの教育 ——

新 井 英 夫

## 1. 序論

ジェイン・オースティン (Jane Austen 1775-1817) は、『分別と多感』 (*Sense and Sensibility* 1811), 『高慢と偏見』 (*Pride and Prejudice* 1813), 『マンズフィールド・パーク』 (*Mansfield Park* 1814), 『エマ』 (*Emma* 1816), 『ノーサンガー・アビー』 (*Northanger Abbey* 1817), 『説得』 (*Persuasion* 1818) の計六編の長編小説を上梓している。オースティンが小説家としてデビューして以来、彼女の小説は何れも人気の衰えを知らない。中でも本論文で扱う『高慢と偏見』は、ブライアン・サウザム (Brian Southam) の指摘を引用するまでもないが “the most popular of Jane Austen’s novels and probably the most popular classic novel in the English language” (87) であり、出版から二百余年の時を経た現代においても「オースティン・ブーム」の牽引役を果たし続けている人気小説である。この人気の理由を理解することは、それほど困難なことではない。主人公エリザベス・ベネット (Elizabeth Bennet) が、積極的で快活な性格の持ち主であることに加え、機知とユーモア感覚に富んでいることが大きい。オースティン自身も 1813 年 1 月 29 日付の姉カサンドラ (Cassandra Elizabeth Austen 1773-1845) に宛てた手紙の中で, “I must confess that I think her [Elizabeth] as delightful a creature as ever appeared in print, & how I shall be able to tolerate those who do not like *her* at least, I do not know” (137) と記し、エリザベスの性格造形に対して自信をみせている。また、ベネット夫人 (Mrs. Bennet) とウィリアム・

コリンズ (William Collins) という英文学における二人の最高の喜劇的道化を備え、さらにキャサリン・ド・バーグ夫人 (Lady Catherine De Bourgh) とエリザベスの衝突という最高の喜劇的対決が描かれたことも大きい。ジョージ・ヘンリー・ルイス (George Henry Lewes) がオースティンを “prose Shakespeare” (115) と呼んだように、その卓越した劇的手法は読者を今なお魅了し続けている。

しかしながら、このような作品の喜劇的な部分に注目すると、作品が「明るくきらきらしすぎる」ために、読者は光が当たらない作品の側面を見逃し、作品の表面を眺めるだけに終わってしまいかねないのではないだろうか。オースティンは先述した姉カサンドラ宛の手紙を書いた直後、同じくカサンドラに宛てた 1813 年 2 月 4 日付の手紙において、以前とは異なる『高慢と偏見』の作風に対する態度を示している。

The work [*Pride and Prejudice*] is rather too light & bright & sparkling; – it wants shade; – it wants to be stretched out here & there with a long Chapter – of sense if it could be had, if not of solemn specious nonsense – about something unconnected with the story. . . . (138)

オースティンは『高慢と偏見』について、どうしてこのような二律背反的な態度を示しているのだろうか。確かにオースティンがいつも自作について謙ったり、カサンドラと冗談を交したりすることが度々あったため、彼女の手紙を率直に受け止めることはできない。また、この手紙を書いた時期、オースティンは以前にも増して宗教心の篤い思索的な状態にあり、“Ordination” という主題で『マンスフィールド・パーク』の執筆を進めていた時期と重なることも忘れてはならないだろう。しかしながら、実は一見喜劇仕立ての作品の側面に、作者のシニカルな現実認識が潜在していることを読者は意識し、作品の奥底に潜むオースティンの眼差しに注意を払う必要があるのではないだろうか。

## 2. フェミニズム批評の限界

『高慢と偏見』は、上層中産階級（Upper Middle-classes）に属する片田舎の四組の男女——シャーロット・ルーカス（Charlotte Lucas）とウィリアム・コリンズ、リディア・ベネット（Lydia Bennet）とジョージ・ウィックカム（George Wickham）、ジェイン・ベネット（Jane Bennet）とチャールズ・ビングリー（Charles Bingley）、エリザベス・ベネットとフィッツウィリアム・ダーシー（Fitzwilliam Darcy）——がそれぞれ紆余曲折を経て、結婚に至る物語である。このことからオースティンは、この小説において18世紀後半の男女関係の理想的姿を描くことを意図していたと推察される。しかし、エリザベスとダーシーの結婚は現実には在り得ず、ご都合主義的な理想に過ぎないと言わざるを得ない。ダーシーはダービシャー（Derbyshire）のペンバリー（Pemberley）に大莊園を持ち、年に一万ポンドの収入を得ている。一万ポンドというダーシーの収入は、彼がイギリスの上位三、四百世帯の一員であることを示し、貴族のそれに匹敵することを意味する。（ブラウン8, 10）事実、エリザベスとダーシーの婚約を知ったベネット夫人は、“Ten thousand a year, and very likely more! 'Tis as good as a Lord!”（358）と叫んでいる。それに比べてエリザベスは、ハーフォードシャー（Hertfordshire）の小村ロングボーン（Longbourn）に住み、父親のベネット氏（Mr. Bennet）は五人の娘を養育する必要がある上に、年に約二千ポンドの上がりしか持たない土地を所有するのみである。ダーシー家とベネット家は経済的隔たりが大きいだけではない。ベネット夫人の義弟フィリップス氏（Mr. Phillips）はメリトン（Meryton）で事務弁護士をしており、また、ベネット夫人の弟エドワード・ガーディナー（Edward Gardiner）はロンドンで商人をしている。このことから社会的身分の点からも両家の隔たりは大きく、二人の結婚は不合理であると言わざるを得ない。オースティンの言う「陰影の欠如」とは、当時の上層中産階級の抱えた社会的・経済的問題や、その階級の女たちが被っていた二重規範（double standard）を無視して、女主人公をシン

デレラの結婚に導いてしまったことに対する反省を含んでいるのではないだろうか。

『高慢と偏見』は、エリザベスが物語の展開と共に成長し、最後にダーシーと結婚してハッピー・エンディングを迎えるので、一般的に当時の社会制度に合致した保守的な価値観を表した小説として受け止められ、女性に道徳的な模範を示す教科書であるとさえ言われたこともあった。(トマリン 261) しかしながら、このようなオースティンの女性問題に関する後進性について、1970年代後半以降、フェミニズム批評によって、その考えが改められるようになった。フェミニズム批評の古典的名著である『屋根裏の狂女』(*The Madwoman in the Attic: the Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* 1979)において、サンドラ・ギルバート(Sandra M. Gilbert)とスーザン・グーバー(Susan Gubar)は、オースティンが経済的・社会的・政治的状态について言及しないのは、逆説的に女が沈黙を続けなくてはならない父権的な支配構造に対する抗議を暗示するためであると指摘した。(146-83) ミリアム・アスカレ(Miriam Ascarelli)はメアリ・ウルストンクラフト(Mary Wollstonecraft 1759-1797)とオースティンのつながりを女子教育の点から挙げ、オースティンが当時の女性を束縛する社会を生き延びる手段として、女性が理性的なることを主張した点にフェミニズムの特徴を見出している。(1-2) クロウディア・L・ジョンソン(Claudia L. Johnson)は、オースティンが保守的な時代の波の中で、間接的に多様な手段を用いて社会批判を紛れ込ませたと指摘している。(24) メアリ・プーヴィー(Mary Poovey)は、ベネット氏が娘たちの希望ある将来のために何も行動せず、社会的には無責任で、道徳的には空虚な人間であると非難している。(194-207) このようなフェミニズムの視点は、読者に新しい多様な読みを提供することに成功した。しかしながら、彼らの論点の全てを受け入れることはできない。例えばギルバートとグーバーの主張は、オースティンの女主人公たちが常に虐げられていることに不平を述べるばかりであり、彼女たちがそういう状態から成長していく様について触れることはない。アスカレの

主張は、エリザベスが主体的に喜んで理性的なることを求め、ベネット氏やダーシーの教えを享受している点を見逃している。プーヴィーの主張は、ベネット氏が社会構造的に力を発揮することができないという現実を無視しており、また、小説の前面にベネット氏が出ずとも、エリザベスへの影響が決して少なくないことに気づいていない。フェミニストたちの主張は、エリザベスがベネット氏やダーシーから多くのことを学んでいくという成長の過程については考察せず、結婚という静的な状態が彼女たちに対して持つ意味合いにのみ焦点を当てて論じている。

当時、上層中産階級の女性が就いても恥ずかしくない職業は、ガヴァネス(governess)と呼ばれる住み込みの女家庭教師とレディース・コンパニオン(lady's companion)以外に無かった。結婚してからも女性の法的人格は認められず、財産は全て夫のものとなり、財産権を行使することはできなかった。(ジョーンズ 37) そのためフェミニストたちは、オースティンの作品を批評する際、女主人公の父権制への批判的態度を見出そうとした。しかしながら、オースティンのテキストには父権が否定的に描かれている箇所は、ほとんど存在しないのである。確かに『ノーサンガー・アビー』において、ヘンリー・ティルニー(Henry Tilney)の父親ティルニー将軍(General Tilney)は、キャサリン・モーランド(Catherine Morland)がジョン・ソーブ(John Thorpe)によって信じ込まされていたような相続人ではないと分かったとき、将軍は激怒し、ヘンリーとキャサリンとの仲がこれ以上深まることを防ぐために彼女を屋敷から追放し、お伴もつけずに長旅へと追いやっている。また『マンズフィールド・パーク』では、ヘンリー・クロフォード(Henry Crawford)の求婚をファニー・プライス(Fanny Price)が断固として受け入れようとしないことに彼女の伯父であるバートラム家の主人サー・トマス・バートラム(Sir Thomas Bertram)が怒り、彼女を懲らしめようと、ポーツマス(Portsmouth)の実家に強制的に送り返している。しかしながら、このような事実が、オースティンが父権を否定的に捉えていたことの直接的な証左とはならない。なぜなら『ノーサンガー・

アビー』では、キャサリンがノーサンガー（Northanger）から追放された後、ウッドストン（Woodston）から戻り事の顛末を知ったヘンリーがキャサリンの後を追いかけて、彼女に求婚して受け入れられており、また、キャサリンの貧困さもジョン・ソーブが吹き込んだほどひどいものではないことが判明し、將軍の同意が得られ、ヘンリーとキャサリンの縁談がまとまり、最初の出会ってから一年足らずで二人が結婚を迎えているからである。『マンスフィールド・パーク』では、最終的にヘンリーの正体は周知のこととなり、ファニーは伯父の好意を取り戻し、また、エドモンド・バートラム（Edmund Bertram）は自分がいかにファニーを頼りにし好ましく思っているかということに気づき、彼女に結婚を申し込み、受け入れられているからである。

このようにオースティンは父権を否定する立場を決して採っていないことから、フェミニズム批評の立場から彼女の文学を論じることには限界がある。デイヴィッド・ロイバーツ（David Roberts）は、ヴィクトリア朝初期の小説では、パターナリズム（paternalism）が支配的だったと説明している。（85-101）パターナリズムとは、日本語で「父権主義」、「父性主義」、「父親的温情主義」と訳され、社会的な関係において成立している父と子のような保護及び支配の関係を意味する。つまり、パターナリズムとは、自己と対象の意志を同一視することから成立し、その行為は善意や良識に従ったものであることを特徴としているのである。『高慢と偏見』では、「子」であるエリザベスが二人の「父」——ベネット氏とダーシー——によって保護を受け、パターナリズムの下で教育されることによって、精神的成長を遂げていると考えることはできないだろうか。

### 3. ベネット氏は失格か

物語の語りの視点はエリザベスに集中して展開していくため、ベネット夫妻の結婚生活についてはあまり多く語られていない。しかしながら物語の最初か

ら、二人のコミュニケーションは成立しておらず、ベネット氏が夫人の無知と愚かさをからかうことにのみ楽しみを見出している様子を窺うことができ、二人の関係が“unsuitable” (228)であることが読者に自然と明らかにされている。二人の結婚はなぜ理想的な結婚とはならなかったのであろうか。エリザベスはその原因を“the impropriety of her father’s behaviour as a husband” (228)にあると指摘している。先ずベネット氏が夫人と結婚に至った経緯を確認しておきたい。

Her father captivated by youth and beauty, and that appearance of good humour, which youth and beauty generally give, had married a woman whose weak understanding and illiberal mind, had very early in their marriage put and end to all real affection for her. Respect, esteem, and confidence, had vanished for ever; and all his views of domestic happiness were overthrown. (228)

ベネット氏は二十三年前の若かりし頃、ベネット夫人の「若さと美貌」に魅了され、彼女の表面的な明るさのみに惹かれ、彼女のものの考え方や性格などを考慮することなく、勢いで結婚してしまった。しかしこうした激しい感情は一過性のものが多く、結婚後すぐにベネット氏はベネット夫人の「理解力の乏しさ」と「心の狭さ」に気づき、全く会話が成立しないことに苛立ちを覚えるようになる。ベネット夫人を軽蔑し、また自分の浅薄な配偶者選別に自虐的になっているからか、ベネット氏は彼女をからかつては怒らせることに喜びを見出している。子供たちの前で妻を笑いものにする父の態度は、エリザベスの心を痛めるほどのものである。確かにベネット氏の側に立てば、結婚生活の不幸な原因はベネット夫人の理解力の乏しさにあるのだから、彼女を嘲笑の的にする自分を正当化したい気持ちも理解できないわけではない。しかしながら、夫には妻を守り、導くことが求められていた時代において、このような態度を取るベネット氏は明らかに夫としての務めを放棄していると言わざるを得ず、夫



としては失格であると指摘されても仕方ない。(坂田 50-52) ベネット氏には夫の務めを果たそうとする意思はみられないが、父親としてはどうだろうか。

キャサリン・ド・バーグ夫人は、エリザベスを含め五人姉妹全員が社交界に出ていることについて、“What, all five out at once?—Very odd! And you only the second.—The younger ones out before the elder ones are married!” (162) と驚きを隠せずにいる。18世紀のイギリスの慣習では長女のみが社交界に送り出され、その下の娘たちは概ね家庭にとどめられていた。(ダットワリア 99) そのためベネット家の娘たちが社会的慣習を無視してまで結婚市場に参加している様子は、キャサリン・ド・バーグ夫人にとってベネット家が非常に無教養な家と映ったとしても当然のことである。このような一家の無教養さを露呈せざるを得ない状況を作り出したのは、ベネット氏に大きな責任があると言わざるを得ない。ベネット氏はいずれ男子が生まれ、限定相続 (entail)<sup>1</sup> の制限を解くことができ、妻とほかの子供たちの生活が保証されることを期待して、将来のための貯蓄を一切怠ってきたのである。ベネット家に男子出生の望みが絶望的になった現在、ベネット家の娘たちが、当時の社会的慣習を無視してまで社交界に出ざるを得ないのは、ベネット氏の一家の長としての無計画さにあることは明らかである。また、キャサリン・ド・バーグ夫人は、“Five daughters brought up at home without a governess!—I never heard of such a thing” (161) と、娘たちを教育するためにガヴァネスをつけなかった両親の教育方針にも驚きを隠せずにいる。当時の上中流階級の女子教育は、ガヴァネスや女子生徒のための学校に委ねていた。その目的は音楽や絵画、フランス語、針仕事などのたしなみ (accomplishment) を身につけさせ、男性の寵愛を得て結婚できるようにすることにあつた。18世紀後半の女子教育の規範を考える上で欠かすことのできない書である『エミール又は教育について』(*Émile, ou De l'éducation* 1762) のなかで、ジャン・ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau 1712-1778) は、女子教育は全て男性に関連付けて考えられなければならないと指摘している。

A woman's education must therefore be planned in relation to man. To be pleasing in his sight, to win his respect and love, to train him in childhood, to tend him in manhood, to counsel and counsel, to make his life pleasant and happy, these are the duties of woman for all time, and this is what she should be taught while she is young. (328)

ベネット家には五人も娘がいるにもかかわらず、ベネット氏は娘たちにガヴァネスを付けることすらせず、無教養で理解力の乏しい妻に子どもの教育のいっさいを任せている。この行為は、当時の時代的慣習から考えると確かに無責任なものであり、父親としても失格であると言わざるを得ないだろう。(坂田 53)

しかしながら、ベネット氏が娘たちに全く無関心であり、娘たちの教育を完全に放棄していたかと言えば、そうではない。ベネット氏が娘たちを完全に“neglect” (161) しているのであれば、娘たちの父親に対する信頼は完全に損なわれているはずであり、エリザベスに“respecting his abilities, and grateful for his affectionate treatment of herself” (228) とは言わせないのではないだろうか。

#### 4. ベネット氏のパターンリズム

『高慢と偏見』は “It is a truth universally acknowledged, that a single man in possession of a good fortune, must be in want of a wife” (5) という有名な一節で始まる。母親であるベネット夫人が、ネザーフィールド (Netherfield) に引越してきたチャールズ・ビングリーを自分の娘の一人と何が何でも結婚させたいという強い願望が感受性豊かに描写されている。その一方、父親ベネット氏は母親と対照的な性格の働きを示し、娘を結婚市場に売り出すことに消極的態度をとっている。しかしこれは彼が娘の結婚に対して道義的責任を回避していることを意味しているわけではない。ベネット氏は夫人にはネザーフィールド

に挨拶に最後まで行くつもりはないと言いつつ、実は最初から行くつもりであり、実際、一人で挨拶に赴いているのである。それは彼が娘の幸せを願っていることを示しており、また自制を欠く妻が勝手にピングリー家と交際を始めようとして失態を犯すのを制しているようにも思われる。ベネット氏がネザーフィールドに挨拶を済ませたという事実を知った夫人の驚きようは凄まじく、夫人は“tumult of joy” (9) をさせて、夫に対してピングリーがいったいどんな人物であるのか再三再四質問している。しかし、ベネット氏はいつもぬらりくらりと逃げるばかりで、これに一切答えようとしていない。

オースティンは感傷主義 (sentimentalism) と呼ばれる思想系譜に属すると言われる第三代シャフツベリ伯爵アントニー・アシュリー・クーパー (Anthony Ashley Cooper, 3rd Earl of Shaftesbury 1671-1713)、及びフランシス・ハチスン (Francis Hutcheson 1694-1746)、デイヴィッド・ヒューム (David Hume 1711-1776)、アダム・スミス (Adam Smith 1723-1790) らの倫理思想を排し、理性的な人間把握の立場をとっている。それは『高慢と偏見』よりも先に書かれた『ノーサンガー・アビー』<sup>2</sup> のキャサリン・モーランドとヘンリー・ティルニー、『分別と多感』のメアリ・ダッシュウッド (Marianne Dashwood) とブランドン大佐 (Colonel Brandon) の結婚からも明らかである。ベネット氏もヘンリーやブランドン大佐の流れを汲む理性人として描かれている。ベネット夫人からピングリーの人物像について問われるベネット氏が優柔不断な態度を取るの、彼が “A fortnight’s acquaintance is certainly very little. One cannot know what a man really is by the end of a fortnight” (9 強調加筆) と述べていることから明らかな通り、相手に関する事実に基づく情報を積み上げることによって、初めてその相手の人格について判断を下そうとする姿勢に起因している。つまり、感情的に第一印象で人間把握をしようとするベネット夫人の楽観主義的態度とは対照的に、ベネット氏は理性的な人間観察者としての態度を示しているのである。

エリザベスはベネット氏と理性主義という共通点を持っている。エリザベス

が友人シャーロット・ルーカスに、ジェインとビングリーが恋に落ちそうだが、ジェインの控えめな態度のために、そのことが世間に知られそうもないと話す場面において、シャーロットは次のような意見を表明している。

If a woman conceals her affection with the same skill from the object of it, she may lose the opportunity of fixing him . . . . In nine cases out of ten a women had better shew *more* affection than she feels. Bingley likes your sister undoubtedly; but he may never do more than like her, if she does not help him on. (22-23)

シャーロットの意見に対して、エリザベスは“she [Jane] cannot even be certain of the degree of her own regard, nor of its reasonableness. She has known him only a fortnight” (23 強調加筆) とジェインの心を推測して反論している。このようなエリザベスの意見は、ベネット氏が相手の人格について、一つ一つ相手に関する内面的・外面的情報を積み重ねて判断を下すときの姿勢と共通するものである。また両者が相手の判断を下すには難しい期間として、「二週間」という同じ数字を挙げていることも、非常に興味深い一致点である。ベネット氏はベネット夫人とは対照的に地味な性格であり、物語の前面に登場することが少ないために、書斎に一人閉じこもり、父親としての責務を放棄した人物であるかのように解釈されることが多い。しかしながら、ベネット氏とエリザベスの人間判断の姿勢に対する共通性に着目することによって、実は娘に対してベネット氏は感情や本能に左右されず、論理的に物事の道理を判断する能力を身につけさせることに成功しており、ベネット氏がエリザベスにパターンリズムに基づいた教育を施していることは明確である。

エリザベスはベネット氏のパターンリズムによって救われることとなる苦難に陥っている。それはエリザベスがベネット家の所有するロングボーンの相続人であるコリンズ牧師によって求婚され、危うく結婚市場の「犠牲の山羊」

(scapegoat) にされかける場面である。

コリンズはベネット氏の甥であるが遠戚であって、これまでベネット家とはほとんど付き合いがなかった。後見人のキャサリン・ド・バーク夫人によって、ケント州のハンズフォード (Hunsford, Kent) の実入りの多い教区司祭の職を与えられたばかりのコリンズは、ベネット家との和解を申し出て、ロングボーンに限定相続人として乗り込んでくる。彼は他人同然の自分がベネット家の財産を相続することに、おそらく彼なりに後ろめたさを感じていたものであり、その埋め合わせをするために、ベネット家の娘の一人と結婚することを画策していたのである。コリンズは自分がロングボーンの相続人であるから、ベネット家の娘たちは喜んでプロポーズを受け入れるだろうと自分勝手な自信に満ち溢れていた。コリンズが最初に選んだ結婚の相手はジェインであった。それは年齢からいっても、美しさからいっても当然の選択であった。しかし、ジェインがビングリーと婚約しそうだと知らされると、彼はベネット夫人が暖炉の火を掻き回している間に、当事者の気持ちなど関係なく、何の躊躇もなく標的をエリザベスに変えてしまうのである。語り手が“Elizabeth, equally next to Jane in birth and beauty, succeeded her of course” (70) と述べている通り、そこにはコリンズの愛情の流れは存在せず、形式尊重主義と功利主義的損得勘定の原理しか働いておらず、無節操であるという謗りは免れない。

コリンズはあまり頭のいい男ではなく、奇妙奇天烈な人間ではあるが、エリザベスへのプロポーズは抜け目なく計画している。それはまずネザーフィールドの舞踏会で最初の二曲を一緒に踊るようにエリザベスに約束させ、次にベネット夫人に根回しして婚約を承諾させるというものである。コリンズはエリザベスと結婚する理由として、第一に教区民に結婚生活の模範を示すためであり、第二に結婚することで自分もさらに幸福になると確信しているからであり、第三に庇護者であるキャサリン・ド・バーク夫人の “the particular advice and recommendation” (103) があったことを挙げている。さらに彼はエリザベスの財産には無関心であることを次のように強調している。

To fortune I am perfectly indifferent, and shall make no demand of that nature on your father, since I am well aware that it could not be complied with; and that one thousand pounds in the 4 per cents. which will not be yours till after your mother's decease, is all that you may ever be entitled to. On that head, therefore, I shall be uniformly silent; and you may assure yourself that no ungenerous reproach shall ever pass my lips when we are married. (104)

コリンズのベネット家の財産に無関心であるかのような発言は、表面的には彼の寛大さを表しているように受け取ることができる。しかしながら、実際にはエリザベスに自分と結婚しなければ年に四分の公債しか貰えないのだということをエリザベスに意識させることが目的なのであり、自分との結婚が非常に有利な条件であり、自分との結婚以外の道は残されていないのだと脅迫しているに過ぎないのである。このようにコリンズはエリザベスが自分のプロポーズを受け入れざるを得ないように、しっかりとその外堀を埋めているのである。しかしエリザベスはそれに勇猛果敢にも抗っていくのである。

コリンズからのプロポーズを明確に断るエリザベスであるが、コリンズはこれを上流社交界の洗練された婦人が用いる“suspense” (106)で、自分の恋心を募らせようというエリザベスの作戦であると勝手に解釈し、何を言われてもへこたれず執拗にエリザベスに迫り続けている。このように結婚市場の「犠牲の山羊」にされかけるエリザベスは、“to apply to her father, whose negative might be uttered in such a manner as must be decisive, and whose behaviour at least could not be mistaken for the affectation and coquetry of an elegant female” (106-07)と、父であるベネット氏を頼りにし、危機的状況を回避しようと試みている。つまり、ベネット氏の父親としての権威は、ロングボーンにおいて決して失われていないのである。

女性の生きる道は結婚しかなかったと言って過言ではなかった時代、ベネット氏が死んだ後、生活の面倒を見てくれる夫を娘たちが見つけられない限り、自分

と娘五人が路頭に迷うことは避けられない現実であることから、ベネット夫人はコリンズからのプロポーズを断ろうとするエリザベスに対して、ベネット氏に“You must come and make Lizzy marry Mr. Collins” (109)と説得するように求めている。娘たちの将来を確実なものにしてやりたいと願うベネット夫人は、やり方に多少問題があったとしても、当時の社会的背景を考えると、母親として何とか縁談を纏めようと奔走することは、親として当然の行為であると言えよう。しかし、ベネット氏は夫人の求めに応じることなく、エリザベスにプロポーズを受諾するか否かについて、機知に富んだ次のような忠告をしている。

An unhappy alternative is before you, Elizabeth. From this day you must be a stranger to one of your parents. – Your mother will never see you again if you do *not* marry Mr. Collins, and I will never see you again if you do. (109-10)

勿論、エリザベスはコリンズとの結婚という危機的状況を、この父親の言葉をきっかけに回避でき安堵しているが、ベネット氏の発言は本当にエリザベスの幸せを願ったパターンリズムに基づいたものだったのであろうか。

コリンズはエリザベスに振られるが、その二日後には彼女の親友であるシャーロットにプロポーズする。コリンズが三日のうちに二人の女性に求婚したことは驚くべきことだが、さらに驚くべきことは、シャーロットが“a conceited, pompous, narrow-minded, silly man” (133)であるコリンズの求婚を受け入れたことである。財産も少なく、特に美人でもなく、二十七歳にもなるシャーロットは、当時の女性が置かれた社会的状況を鑑みると、何としても早く結婚しなければならなかったのである。彼女がコリンズの求婚を受け入れたのは、“the pure and disinterested desire of an establishment” (120)からであって、コリンズに対する愛情があったからではない。彼女が結婚すれば、妹たちは社交界に出ることができるし、弟たちは彼女が「オールド・ミス」(old miss)として自分

たちの財産を圧迫することになるのではないかという不安から解放されるのである。つまり、シャーロットがコリンズのプロポーズを受け入れたのは、女性に対する深刻な社会的圧力が背景に存在しているのである。

ベネット氏は姉妹の中でもエリザベスに対する愛情が最も深い。ビングリーがネザーフィールドにやってきたとき、ベネット氏は“I must throw in a good word for my little Lizzy. . . . They have none of them much to recommend them” (6) とエリザベスを推している。この発言の後、ベネット氏がビングリーに挨拶に出かけていることから、彼がエリザベスの将来を幸せなものにすべく重い腰を上げていることがわかる。このようにエリザベスに対する深い愛情を持っているベネット氏が、エリザベスの危機的状況において、先述したベネット夫人とのやりとりのなかで、エリザベスの幸せを願ったパターンリズムに基づいた発言をしていないとは到底考えられない。ベネット氏がコリンズとエリザベスを結びつけようとししないのは、当時の女性が負っていた社会的圧力によりエリザベスが屈することのないように、父親として娘の幸せを真に願い、保護するためであると捉えることができるのではないだろうか。

最終場面において、エリザベスはダーシーからの二度目の求婚を受け入れる。この知らせを聞いたベネット夫人の驚きようは大変なものであり、聞いた瞬間こそ体が硬直したみたいに言葉も出なかったが、我に返ると喜びを爆発させている。しかしベネット氏は、エリザベスの結婚に不安を抱いている。

I know your disposition, Lizzy. I know that you could be neither happy nor respectable, unless you truly esteemed your husband; unless you looked up to him as a superior. Your lively talents would place you in the greatest danger in an unequal marriage. You could scarcely escape discredit and misery. My child, let me not have the grief of seeing *you* unable to respect your partner in life. You know not what you are about. (356)



ベネット氏のこのような不安は、反発しあっていた二人が、互いにそれぞれの高慢と偏見を克服し、互いを理解するに至った経緯を十分把握していないことによる。功利主義的損得勘定の原理から二人の結婚を喜んでいるベネット夫人とは異なり、ベネット氏がエリザベスとダーシーの結婚に承諾を与える条件は、夫を自分より立派な人間として尊敬できるかどうかということであった。つまり、父性優位の家庭を築くべきであるとエリザベスに教え諭しているのである。エリザベスはこの父親の言葉に胸がいっぱいになり、何とか父親を納得させ、ダーシーとの結婚を承諾してもらおうと、“his affection was not the work of a day, but had stood the test of many months suspense” (356) と必死に訴えている。このようなエリザベスのダーシーを愛する方法は、ベネット氏が相手の人格について、一つ一つ相手に関する内面的・外面的情報を積み重ねて判断を下すときの理性主義的姿勢と共通するものであることから、これまでベネット氏がエリザベスに対して行ってきたパターナリズムに基づいた教育が、エリザベスの永遠の幸せという形で結実したことを意味している。

## 5. ダーシーのパターナリズム

エリザベスはベネット氏だけでなく、ダーシーのパターナリズムによって救われることとなる苦難にも陥っている。それはメリトンで会ったウィッカムというダーシー家の元執事の息子に騙され、その上、彼に恋をしてしまうという場面である。

ウィッカムは『分別と多感』のジョン・ウィロビー (John Willoughby) や『マンスフィールド・パーク』のヘンリ・クロフォード、そして『説得』のウィリアム・エリオット (William Eliot) などと同様に、オースティン文学に共通する悪役の特徴を具えている。ウィッカムは優雅な物腰、きらめくような機知、洗練された容姿から称賛的となっているが、その表面的な魅力は良心のとがめのなさや冷笑的で自己本位な性格の隠れ蓑となっている。ウィッカムの言説

は真実を伝える媒体としての機能をほとんど有していない。全て自分に都合が良いようにもっともらしい論理的な裏づけを与え、聞き手を信じ込ませるその話術は非常に巧妙である。しかしながらエリザベスがウィッカムの言説を信じてしまったことについては、ある程度、彼女にもその責任があるのではないだろうか。

ウィッカムにダーシーのことを尋ねられたエリザベスは、“I have spent four days in the same house with him, and I think him very disagreeable” (76) と、自らダーシーへの不快感を吐露し、また “He is not at all liked in Hertfordshire” (76) とダーシーを中傷している。エリザベスは自分がダーシーに偏見的態度を持っていることを早々にウィッカムに悟られてしまっているのである。ウィッカムの話術は非常に巧妙であり、彼女のダーシーへの偏見を上手く利用して、ダーシーに対する根も葉もない中傷をエリザベスに間接的に吹き込むのである。ウィッカムは自分の親にも自分自身にも大変よくしてくれたと謙虚な態度でダーシーの父親への敬愛を示し、いかにも公平な人物であるかのように装っている。しかしながら、その効果は、聞き手であるエリザベスの信頼を獲得し、現在の当主ダーシーの卑劣さを強調することに向けられている。そもそもウィッカムの議論は表層的である。ウィッカムは自分がダーシーから保護を受けることが当然であるように語るが、本当に自分がその保護を受けるに足る人物であるのか、そしてダーシーと対等に付き合える人間であるかどうかについては、いっさい語っていない。また、ウィッカムは自分が貰うはずだった聖職禄をダーシーが取り上げたのは、自分が浪費家で無分別であったからだと言わせているが、その浪費癖や無分別がいかなる内容のものであったのかを明らかにせず、有耶無耶にしている。エリザベスはウィッカムの都合のよい話の提示方法に惑わされるのである。

エリザベスはダーシーがウィッカムにひどい仕打ちをする原因について尋ねたとき、ウィッカムは “A thorough, determined dislike of me – a dislike which I cannot but attribute in some measure to jealousy” (78) と説明している。莫大な

財産を相続するダーシーが、ただの莊園管理人の息子にすぎないウィッカムに嫉妬する理由はどこにも見当たらないことから、ウィッカムの説明が全く理屈の通らぬ感情的に発せられたものであることは明らかである。しかしながら、エリザベスは “I had not thought Mr. Darcy so bad as this – though I have never liked him, I had not thought so very ill of him” (79) と、ウィッカムの言葉を鵜呑みにして信じてしまう。それは “there was truth in his looks” (85) とジェインに語る言葉が象徴しているように、エリザベスの判断が事実に基づく情報を積み上げることによって為されたものではなく、 “model of the amiable and pleasing” (150) とも思えるウィッカムの外見上の好印象にエリザベスが夢中になっていることに起因する。エリザベスの判断の誤りは、審美的評価を倫理的評価と取り違えた結果であり、 “only agreeable” と “truly amiable” (デーヴ 120) を識別できなかった点にある。このようなエリザベスの過ちは、本来ベネット氏によるパターナリズムに基づいた教育によって正されるべき事柄である。しかしながら、ロングボーンの家から外に出ることのないベネット氏にとって、メリトンのフィリップス家におけるウィッカムとの会話をきっかけに起こるエリザベスの過ちは、娘を監督及び教育することができる範囲外で起きており、パターナリスティックな力を発揮することができない状況にある。このような状況下において、ベネット氏に代わってエリザベスをウィッカムの策略から救い出し、感情や本能に左右されず、論理的に物事の道理を判断する能力を身につけさせる役割を担うのがダーシーである。エリザベスの教育はベネット氏からダーシーに引き継がれるのである。

エリザベスとダーシーが初めて出会うのは、メリトンで催された舞踏会である。舞踏会に現れた直後のダーシーは “his fine, tall person, handsome features, noble mein” (12) であると評判が高く、さらに年収一万ポンドの大富豪だという噂によって、彼はその場に集まった人々の注目を一身に集めることとなった。しかしダーシーはビングリー姉妹とだけダンスをし、ほかの女性に紹介されることを断り、部屋の中を歩き回り、仲間としか話をしないことで、すぐに

皆から “the proudest, most disagreeable man in the world” (13) と烙印を押されてしまう。さらにビングリーにエリザベスとダンスすることを勧められたダーシーは、彼女の方に視線を向け、“She is tolerable; but not handsome enough to tempt me; and I am in no humour at present to give consequence to young ladies who are slighted by other men” (13) と冷淡に言い放っている。エリザベスはダーシーの高慢な態度、「世界一高慢でいやな男」という評判、そして偶然エリザベス自身が耳にしたこの言葉によって、ダーシーが高慢な男だという偏見をエリザベスは持つようになり、ウィッカムのダーシーに対する中傷を無批判に受け入れてしまうのである。

ダーシーはエリザベスを軽視していたが、次第に彼女の顔が表情豊かな黒い瞳のおかげで、非常に知的に感じられることに気づくと同時に、軽やかで感じがいい容姿、上流社会の人間のように上品ではないが自然で陽気な振る舞いといった彼女の外見の魅力に心惹かれるようになる。さらにダーシーは、彼自身意識してはいないようだが、階級制度や礼儀作法に挑戦するようなエリザベスの言動に魅力を感じるようになっていく。サー・ウィリアム・ルーカス (Sir William Lucas) 邸でのパーティで、エリザベスはダーシーのダンスの申し出をきっぱりと拒否する。しかしダーシーはこのような肘鉄砲を食らっても、なぜかエリザベスに腹を立てることなく、むしろ彼女に対して気持ち良い満足感のようなものを覚えている。そして彼はキャロライン・ビングリー (Caroline Bingley) に “I have been meditating on the very great pleasure which a pair of fine eyes in the face of a pretty woman can bestow” (27) と、自分がエリザベスに関心を持っていることを公言するまで、彼女の外面的・内面的魅力に惹かれるようになるのである。

ダーシーはエリザベスへの想いを抑えることができず、シャーロットとマライア (Maria Lucas) が散歩に出かけ、エリザベス一人が留守番をしているハーフォードシャー (Hertfordshire) の客間を突然訪問している。このときダーシーは自分の椅子をエリザベスの方へ引き寄せるという大胆な行動をとって彼

女との距離を縮め、二人だけで話す機会を設け、自分の想いを告げようと試みている。しかし、このときはシャーロットとマライアが散歩から帰ってきてしまったため、ダーシーはエリザベスに想いを告げることができずに終わってしまう。(173-75) 18世紀後半において、未婚の男女が一つの部屋に第三者の存在なく、二人きりになることは、男性が女性にプロポーズをするなどの特別な場面に限られる。そのため、シャーロットがダーシーとエリザベスが二人だけで話をしているのを見て驚き、“he must be in love with you” (175) と分析して見せたのは当然である<sup>3</sup>。このようなあからさまなダーシーの行動にもかかわらず、エリザベスは自分がダーシーの関心の的になっていることに全く気付いていない。それはダーシーへの偏見に満ちたエリザベスが、完全に彼の気持ちに盲目であったことを意味している。

ダーシーのエリザベスへの情熱は、彼自身の躊躇する心を圧倒し、ビングリー姉妹の露骨な嘲笑にもキャサリン・ド・バーグ夫人の軽蔑にも耐え、ついには自らの“will”にも“reason”にも“character”にも反して(186)、エリザベスにプロポーズさせている。ダーシーはエリザベスへのプロポーズを“*In vain have I struggled. It will not do. My feelings will not be repressed. You must allow me to tell you how ardently I admire and love you*” (185) という言葉で始める。そして“*the strength of that attachment which, in spite of all his endeavours, he had found impossible to conquer*” (185) を訴え、エリザベスにプロポーズを受け入れて、その愛に報いて欲しいと哀願して、求婚を終えている。このプロポーズをエリザベスは明確に拒否している。エリザベスはダーシーのプロポーズを拒否した理由の一つとして“*he was not more eloquent on the subject of tenderness than of pride*” (185) ことを挙げている。つまりエリザベスは、ダーシーが自らの社会的優位性についてより多く語ったことに憤慨しているのである。しかしながら、ダーシーの告白は、身分も家柄も違うので諦めるべきではないかという彼の理性、あるいはダーシー家当主としての義務よりも、エリザベスを愛しているという感情が勝ったことによって決断させたプロポーズであ

ることを忘れてはならない。シャーロット・ブロンテ（Charlotte Brontë 1816-1855）はオースティンの小説には情熱が感じられないと言って批判している<sup>4</sup>が、ダーシーのエリザベスに向けられたプロポーズの言葉が深遠なる愛の情熱に溢れたものであることは、ダーシーの社会的境遇を考えれば、たとえ愛情に関する言葉をプロポーズの言葉に具体的に含めなかったとしても、容易に感じ取ることができるものであり、エリザベスのダーシーへの非難は、彼女の偏見による盲目さ故である以外に他ならない。

言葉はいったん話されたらその場で消滅していくものであるため、深い理性を働かせる余地がなく、エリザベスを盲目から解放することは不可能である。（門田 145）そこでエリザベスに求婚を拒否されたダーシーは、手紙を書くことでエリザベスの批判に対して弁明を行っているが、これは非常に意味深いことである。なぜならばダーシーからの手紙は、エリザベスに全部暗記されるほど何度も繰り返し読まれ、全ての文章がじっくり検討され、確かな情報が積み重ねられ、エリザベスに理性的な判断を下させることを可能にしているからである。

エリザベスはダーシーのプロポーズを受け入れられない理由として、二つのことを挙げている。その一つは、彼がジェインとビングリーの仲を引き裂いたことである。もう一つは彼がウィッカムの正当な権利を無視して、人道に背いて、彼の幸福を破壊し、将来を台無しにしたということである。ダーシーからエリザベスの二つの批判に対する弁明の手紙を受け取ったエリザベスは、当初ダーシーの手紙が“all pride and insolence”（198）であると判断し、彼の言うことに公平に耳を傾けるつもりもなかった。しかしエリザベスは、何とか冷静な頭で、一文一文の意味をじっくり検討してみると、ダーシーの言っていることは全体として辻褄が合い、全てにおいて正しいのではないかと思えるようになってくる。

まずダーシーはジェインとビングリーの仲を裂いた理由について弁明している。それはジェインがビングリーに少しも愛情らしきものを表さないの、彼

女が彼を愛していないと確信したためであり、また、ジェインとエリザベスを除くベネット家の人々にみられる“that total want of propriety” (193) のためであったという。エリザベスは初めは感情的にダーシーの弁明を全て嘘だと決め付け、大いに憤慨する。しかし、エリザベスはじっくりとダーシーの手紙の該当箇所を読み返すことによって、シャーロットの“Jane’s feelings, though fervent, were little displayed, and that there was a constant complacency in her air and manner not often united with great sensibility” (202) というジェインに対する言葉や、ネザーフィールドで催されたパーティにおいて、ジェインとエリザベスを除く家族全員が泣きたいほど情けない気持ちになるほどの醜態を演じていたことを思い出すことができるようになる。エリザベスはこのような過去の事実を一つ一つ思い出すことによって、ダーシーの家族に対する非難が致し方ないものであるとの結論に至る。

次にダーシーはウィッカムを不当に扱ったという批判に関して“the whole of his connection with my family” (194) を示すことによって弁明している。ダーシーの手紙によれば、ウィッカムは自分から聖職禄を辞退して、その代わりにもっと金が儲かる法律関係の仕事に就くための経済的援助を願い出たという。ダーシーはこの申し出を受け入れ、聖職禄の権利の代わりとして三千ポンドの経済的援助を行ったが、ウィッカムは“a life of idleness and dissipation” (195) を送ったために経済的困窮に陥り、再びダーシーに聖職禄に推薦して欲しいと申し出たという。しかしダーシーがこの申し出に応じなかったために、ウィッカムは財産と復讐のために、ダーシーの妹のジョージアナ (Georgiana Darcy) を誘惑して駆け落ちしようと企んでいたという。このようにダーシーはウィッカムの“the vicious propensities” と“the want of principle” (194) を具体的に説明する。エリザベスはウィッカムへの思いから、ダーシーの弁明をすぐに信用することはできなかったが、ほとんど記憶するまでダーシーの手紙を繰り返し読むことで、その内容と実体験を照らし合わせ、ダーシーの弁明の全てについて、その正当性を認めざるを得なくなる。エリザベスは自らの偏見のために

人物や物事の実体が見えなくなっていたことを、ダーシーからの手紙によって思い知らされるのである。

“How despicably I have acted!” she cried. – “I, who have prided myself on my discernment! – I, who have valued myself on my abilities! who have often disdained the generous candour of my sister, and gratified my vanity, in useless or blameable distrust. – How humiliating is this discovery! – Yet, how just a humiliation! – Had I been in love, I could not have been more wretchedly blind. But vanity, not love, has been my folly. – Pleased with the preference of one, and offended by the neglect of the other, on the very beginning of our acquaintance, I have courted prepossession and ignorance, and driven reason away, where either were concerned. Till this moment, I never knew myself.”  
(201-02)

ダーシーの手紙は、エリザベスの偏見を克服させ、彼女にダーシーの本当の姿を理解させるという役割を果たすだけでなく、彼女のその後の人に対する見方に大きな影響を与えることになる。例えば、ロングボーンに戻ったエリザベスは、妹たちの醜態に嫌気がさし、家族の愚行と無作法をはっきり認識するに至る。特にリディアがフォースター大佐夫人（Mrs. Harriet Forster）から誘われたブライトン（Brighton）への旅行を、自分が嫌われたとしても何とか制し、ベネット家がこれ以上世間から軽蔑されるような事態に発展しないように行動している。またエリザベスは、ウィッカムの後見人であるダーシーやフィッツウィリアム大佐（Colonel Fitzwilliam）に会ったことをウィッカムに伝え、そのときのウィッカムの顔に表れた不快な表情を決して見逃さず、彼の本当の人間性を見抜いている。

ダーシーの手紙によって開眼したエリザベスは、その後、ガーディナー夫妻とともに訪れたペンバリー（Pemberley）で、初めてペンバリーの庭園や邸宅



を目の当たりにし、その趣味のよさと彼の精神性に惹かれ、“to be mistress of Pemberley might be something!” (235) と思うようになる。また、エリザベスはダーシーを四歳の時から知るというペンバリー館の老家政婦ミセス・レノルズ (Mrs. Reynolds) からダーシーが、地主としても主人としても非の打ち所のない人物であることを知らされ、ダーシーの肖像画を前にして、これまでにない優しい気持ちを抱くことができるようになる。このようにダーシーの手紙は、ダーシーによるエリザベスに対するパターナリズムに基づいた教育の象徴となっており、エリザベスに一つ一つ相手に関する内面的・外面的情報を積み重ねて判断を下す理性主義的姿勢を身につけさせることに成功しているのである。このような過程を経て、エリザベスはダーシーに対する誤解を完全に払拭し、彼の自分に対する心遣いに感謝することができるようになり、彼の二度目のプロポーズを受け入れることができるまでに成長するのである。

## 6. 結論

これまで論じてきたように『高慢と偏見』では、「子」であるエリザベスが二人の「父」——ベネット氏とダーシー——によって保護を受け、パターナリズムに基づいた教育を受けることによって、感情や本能に左右されず、論理的に物事の道理を判断する能力を身につけて精神的成長を遂げている。そのため本小説の教養小説 (Bildungsroman)<sup>5</sup> 的側面は明らかである。エリザベスはベネット氏とダーシーから理性的に分別を働かせることを繰り返し求められ、その理性主義的姿勢の獲得が、父性愛の全面的受容に至り、最終場面においてエリザベスに “I am the happiest creature in the world. Perhaps other people have said so before, but not one with such justice” (361) と言わしめる結論へと導いているのである。

## 註

1 限定相続とは、ある地所を相続する予定の人間が、それを売ったり抵当に入れたりしないで、そこから上がる収入だけを自分のものとするように、土地に条件を付けることを意味する法律用語である。長子相続 (primogeniture) とともに、この限定相続は、イギリス貴族がその広大な地所を何世紀にもわたって完全な形で子孫に伝えていくことを可能にした法的基盤である。(プール 304)

2 『ノーサンガー・アビー』はオースティンの最後の完成された小説である『説得』とともに、オースティンの死後 1817 年に出版社のジョン・マリーから合本という形で出版された。しかしながら、現在では、『ノーサンガー・アビー』はオースティンの初期作品であると考えられており、執筆年代は、R. W. チャップマン (R. W. Chapman) がオックスフォード版で示した 1798 年から 1803 年とするのが妥当であると考えられている。(xi)

3 デイヴィッド・セシル (David Cecil) は、オースティンの小説には些細な所作によって、驚愕や侮蔑、愛情などを表していると論じている。その例として、ダーシーがエリザベスに “his bringing back his coffee cup himself” (322) という場面を挙げ、このような行動が彼のエリザベスに対する恋心を十分に読者に伝えるものであると説いている。(112)

4 シャーロット・ブロンテは、文芸評論家ジョージ・ヘンリ・ルイスの忠告に従って、オースティンの作品を読んだときの感想を、1850 年 4 月 12 日付の W. S. ウィリアムズ (W. S. Williams) 宛の手紙の中で、“She does her business of delineating the surface of the lives of genteel English people curiously well. . . she ruffles her reader by nothing vehement, disturbs him by nothing profound: the Passions are perfectly unknown to her. . . even to the Feelings she vouchsafes no more than an occasional graceful but distant recognition” と述べている。(スミス 383)

5 ジェロム・ハミルトン・バックリイ (Jerome Hamilton Buckley) は、スザンヌ・ハウ (Susanne How) の定義を借用して、「教養小説」について “The Bildungsroman in its pure form has been defined as the noblest of all-around development or self-culture with a more or less conscious attempt on the part of the hero to integrate his powers, to cultivate himself by his experience.” (13) と説明している。つまり、「教養小説」とは、人生の門出に立つ地方出身の青年が、様々な生活経験及び試練を経て精神的に成長し、自己認識や自己確立に至る過程を描く形式を意味する。

## 引証文献

- Ascarelli, Miriam. “A Feminist Connection: Jane Austen and Mary Wollstonecraft.” *Persuasions On-Line*, Jane Austen Society of North America, V. 25 No. 1 (Winter 2004) Web. 11 July. 2014.
- Austen, Jane. *Jane Austen Selected Letters*. Oxford: Oxford UP, 2004. Print.
- . *Mansfield Park*. London: Penguin, 2003. Print.
- . *Northanger Abbey*. London: Penguin, 2003. Print.

- . *Pride and Prejudice*. London: Penguin, 2003. Print.
- Brown, Julia Prewitt. *A Reader's Guide to the Nineteenth-Century English Novel*. New York: Macmillan, 1985. Print.
- Buckley, Jerome Hamilton. *Season of Youth: the Bildungsroman from Dickens to Golding*. Cambridge: Harvard UP, 1974. Print.
- Cecil, David. *Poets and Story-tellers: A Book of Critical Essays*. London: Constable, 1949. Print.
- Chapman, R. W.. "Introductory Note to *Northanger Abbey* and *Persuasion*." Introduction. *Northanger Abbey* and *Persuasion*. By Jane Austen. New York: Oxford, 1923. xi. Print.
- Dhatwalia, H. R.. *Familial Relationships in Jane Austen's Novels*. New Delhi, India: National Book Organization, 1988. Print.
- Johnson, Claudia L.. *Jane Austen: Women, Politics, and the Novel*. Chicago: Chicago UP, 1988. Print.
- Jones, Vivien. *How to Study a Jane Austen Novel*. London: Macmillan, 1997. Print.
- 門田守「『高慢と偏見』における男と女——ヒロインの成長と父性主義の原理——」『鳥取大学教育学部研究報告 人文・社会科学 43.2 (1992): 129-160. Print.
- Lewes, G. H.. *The Leader* (22 November 1851). Print.
- Pool, Daniel. *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew: From Fox Hunting to Whist – the Facts of Daily Life in 19th-Century England*. New York: Simon and Schuster, 1993. Print.
- Poovey, Mary. *The Proper Lady and the Woman Writer: Ideology as Style in the Works of Mary Wollstonecraft, Mary Shelley, and Jane Austen*. Chicago: Chicago UP, 1984. Print.
- Roberts, David. *Paternalism in Early Victorian England*. New Brunswick, N. J.: Rutgers UP, 1979. Print.
- Rousseau, Jean Jacques. *Emile*. Translated by Barbara Foxley; Introduction by Andre Boutet De Monvel. London: Dent, and New York: Dutton, 1955. Print.
- 坂田薫子「ベネット夫妻の言い分——ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』に見られる結婚の理想と現実」『日本女子大学紀要』文学部 58 (2009): 49-63. Print.
- Sandra M. Gilbert and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Women Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale UP, 2000. Print.
- Smith, Margaret, ed. *The Letters of Charlotte Brontë*. Vol. 2. Oxford: Oxford UP, 2000. Print.
- Southam Brian. *Jane Austen: The Critical Heritage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1968. Print.
- Tave, Stuart M.. *Some Words of Jane Austen*. Chicago: Chicago UP, 1973. Print.
- Tomalin, Claire. *Jane Austen: A Life*. London: Penguin, 2000. Print.

※ 本稿は2012（平成24）年度に交付を受けた松山大学特別研究助成による研究成果の一部である。